

[解説]

ヤクプ・チェシュカ氏による論考「複数形の作家から、フラバルの詩的世界の想像される重点へ」に寄せて

阿部 賢一

以下では、ヤクプ・チェシュカ氏による論考「複数形の作家から、フラバルの詩的世界の想像される重点へ」のチェコ語の原文および日本語訳を掲載した。

ヤクプ・チェシュカ (doc. Jakub Češka, Ph.D.) 氏は、現在、カレル大学人文学部准教授であり、フランスのナラトロジーを中心に、ロシア・フォルマリズム、チェコ構造主義、フィクション理論など、散文の解釈を研究領域とし、とりわけミラン・クンデラ、ボフミル・フラバルの作品研究およびロラン・バルトの記号論を専門としている。著書に『モチーフの王国 ミラン・クンデラの小説のモチーフ分析』(2005)、『隷属化した神話 ロラン・バルト』(2010)、『ボフミル・フラバル 複数形の作家』(2018) などがある。

今回掲載した論考は、2020年1月10日、現代文芸論研究室との共催で、チェコセンター東京で開催された講演「ボフミル・フラバルの詩学の変わらぬもの」を大幅に加筆したものである。なお、検閲に関する箇所は、すでに発表された以下の論考の一部が用いられているが、それ以外のほとんどは今回のための書き下ろされたものである (Jakub Češka: Zrod Hrabalova spisovatelství: Lektorské řízení Hrabalovy tvorby v nakladatelství Československý spisovatel v první polovině šedesátých let. *Slovo a slovesnost*, roč. 79, 2018, č.2, s. 83-121)。

本論は、フラバル作品におけるヴァリエーションの問題を、検閲・編集上の圧力との関係、ならびに作家自身の意志表示の表れという二つのレベルで捉えるという重層的な視点に特徴づけられている。前者は批評家ピーシャの審査書の綿密な読解を通して行われ、また後者は拡散(複数形の作家)と統合(中核、重点)という二つのアプローチの交点として導き出されたものである。「検閲はその姿が不在のまま機能していたのである」という指摘は、1960年代のチェコスロヴァキアの出版状況のみならず、検閲文化全般を考えるうえで示唆に富むものである。またミラン・クンデラの詩学を随時参照することで、両者の詩学の対比という比較文学的なアプローチにも通じており、両作家を専門とする同氏ならではの鋭い指摘が随所に見られる。とりわけ隠喩と換喩のアプローチの違いについては、ほかの文学作品にも適用できるものであろう。

同論考を寄稿し、翻訳にあたって数々の質問に答えてくれたヤクブ・チェシュカ氏にこの場を借りてお礼申し上げたい。

なお、同氏の講演およびこの翻訳は、科研費・基盤研究（C）「ボヘミア文学史の記述に関する研究」（研究課題番号：19K00493、研究代表者：阿部賢一）の成果の一部である。